

太宰府の文化財

399

大宰府の羅城

「古代の大宰府を守った外郭施設」



赤の破線が羅城の想定位置 (画像提供 九州歴史資料館)



想定される羅城の北東城 (天拝山頂より)

50年に及ぶ古代大宰府の調査研究の大きな成果の一つに、大宰府を守った大野城跡や水城跡、基肄城跡をつなぐ施設の存在が明らかになりつつあることが挙げられます。

本市の南に位置する筑紫野市の前畑遺跡は西鉄筑紫駅西側の丘陵地にあります。昨年、ここで古代の土塁が発見されました。この土塁は基肄城方面から大宰府に向かう方向を持つことから、大宰府を取り囲む城壁の機能を持った外郭施設だった可能性が指摘されました。このような施設が存在は、考古学による大宰府研究の礎を築いた九州大学の鏡山猛の著書『北九州の古代遺跡』(1956年刊行)の中で大宰府の「羅城」と呼称され、

具体的な外郭線の位置は国立歴史民俗博物館の阿部義平の論文「日本列島における都城形成・大宰府羅城の復元を中心に」(1991年刊行)の中で紹介されました。

「羅城」は主に中国の唐代以降に使用された、都市を取り囲む城壁を示す言葉で、その用語は中国の地方都市や諸外国の都市にも使われました。日本に

おいては『日本書紀』天武8(679)年11月条に「難波に羅城を築く」とあり、古代の時点で京に係る施設としての「羅城」の用語が使われていたようです。本市と友好都市の関係にある韓国扶餘にあった百済の首都「泗泚」にも戦前から羅城があったことが知られ、羅城の遺構は現在では世界遺産「百済歴史地域」の構成資産になっています。日本での「羅城」の概念についても前畑遺跡の発見をきっかけに論議が盛んになっています。

阿部説によれば大宰府をとりまく「羅城」は総延長で約50キロメートルの規模となり、東アジアでも屈指の規模の施設となるようです。前畑遺跡の発見がきっかけとなり福岡県が主体となって関係する市町の教育委員会が参加して、大宰府の外郭施設としての土塁や関連施設を探すプロジェクトが立ち上げられ、小郡市域や本市の大野城跡内などで新たな発見がありました。本市においても地元のご協力をいただき四王寺山から宝満山、高雄地区などで「羅城」の痕跡を探す作業を続けています。

大宰府発掘50年を迎え、新たな古代大宰府の調査研究が進められています。



関係者による現地踏査 (平成29年度)

文化財課 山村 信榮